

# 偏見の自己制御

帝京大学文学部心理学科講師  
大江朋子 (おおえ ともこ)



## Profile — 大江朋子

2004年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。清泉女学院大学講師を経て、2010年から現職。博士（社会心理学）。専門は社会心理学、社会的認知。主な著書は、『個人のなかの社会』（分担執筆、誠信書房）、『社会心理学：社会で生きる人のいとなみを探る』（分担執筆、ミネルヴァ書房）、『パーソナル・コンピュータによる心理学実験入門：誰でもすぐにできるコンピュータ実験』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。

### 偏見の自動性とその功罪

下の二つの例を見てほしい。これらは、どちらも実際に起こった出来事である。

例1では、「夜道で声をかけてくる男性は危険だ」という偏見が利用されている。男性が本当に不審者であったなら、瞬時に危険を感じたAさんは、強盗や暴行といった犯罪から逃れることができるかもしれない。しかし、実際には違っていた。

例2は、「黒人」から「不審者」や「銃」が連想されやすいこと、つまり黒人に対する偏見から生じた事件だとされる。被害者はギニア出身の若者、アマドウ・ディアロ。犯罪歴はなく、

撃たれたときには、単に自分の住むアパートに入ろうとしているところだった。警官たちは合計41発の弾丸を使い、そのうち19発を受けて彼は即死した。彼が本当に銃を持っていたなら、警官は撃たれてしまっただろう。しかし、実際には被害者は何一つ武器を所持しておらず、警官は起訴され、事件は大問題となった。

これらの例のように、偏見は自動的に働き、瞬時の判断が必要なとき、あるいは、自分の偏見に気づかないときには、偏見に根差した行動を強く方向づける。この偏見の自動性は、反応の準備態勢をとらせるという適応的側面がある一方、思いもしない結果を生む可能性もある。

#### 例1 パーキング・メータ

ボストン郊外に住んでいるAさんは、ある冬の夜、本屋で買い物をした後、駐車場に自分の車を取りに行った。パーキング・メータにコインを入れようとしていると、見知らぬ男性がいきなり背後から声をかけてきた。Aさんは危険を感じて身構え、相手に不審な目を向けてしまう。しかし、その男性は親切にも、この時間帯にはパーキング・メータにコインを入れる必要がないことを教えて去って行く。驚きの余韻でAさんの胸はまだ高鳴っているが、親切な人を不審者だと勘違いして失礼な態度をとってしまったことを、Aさんは恥ずかしく思った。

#### 例2 アマドウ・ディアロ事件

Bさんはニューヨーク市の警官であり、ある夜、3人の同僚とともに車でパトロールをしていた。午前12時40分頃、黒人の男性がアパートの建物の玄関口に立っているのを見つけた。不審な動きをしている。強盗かもしれない。4人は銃を用意して車から降り、その男に近づいて行った。止まれという命令にもかかわらず、男は玄関に駆け込み、ポケットに手を入れてこちらを振り向いた。右手に何かを持っている。Bさんは銃を撃った。弾丸が尽きるまで撃った。同僚たちも撃った。倒れた男の傍に行くと、彼の手元に銃はなく、財布が落ちていた。

自分の中にある偏見，自動的に働く偏見を，人はうまく制御しなければならないようである。

### 偏見の自己制御 — 抑制するのは逆効果？

夜道で声をかけてくる男性を警戒する，高齢者が運転する車に注意を払う，同性愛者をランチにかけるといったことは，偏見を利用する制御の例である。また，話しかけてきた外国人に対する警戒心を相手に気づかれないように振る舞う，障害者とやり取りする際に同情しているそぶりを見せないようにする，女性だからといっておとなしいと思っはいけないと考えるといったことは，偏見を利用しないように抑制する制御の例である。

偏見の自己制御には，このように偏見の利用を促進する制御と抑制する制御があり，15年前ほど前からは，後者の抑制がさかんに研究されるようになった。その理由の一つは，偏見を抑制したくても思いのほかうまくいかないことが明らかになったからである。その代表例は，偏見の抑制によって生じるリバウンド効果であり，これは偏見を抑制した後に，かえって偏見に根差した反応が生じやすくなってしまいうものである。

偏見の抑制によってリバウンド効果が生じることを最初に報告したのは，マクリイラ（Macrae, Bodenhausen & Milne, et al., 1994）である。彼らは，スキンヘッドの男性に対する偏見を実験室に持ち込んだ。欧米では，スキンヘッドの男性は危険な思想をもつ暴力的な集団の一員だと思われることがある。これが事実である場合もあるだろうが，一人のスキンヘッドの男性を目にして怖いと思っいていても，その男性は単にファッションとしてスキンヘッドを取り入れているのかもしれない。

マクリイらは，実験参加者に一人のスキンヘッドの男性の写真を提示し，5分間でその人物の典型的な一日を記述するよう求めた。このとき，半数の参加者は偏見を反映させないようにしながら（抑制条件），残りの半数の参加者はそのような抑制をせずに（抑制なし条件），記述課題を行った。実験結果はリバウンド効果を

支持するものであり，抑制条件の参加者は，抑制なし条件の参加者に比べ，後続の実験で同席することになったスキンヘッドの男性の席から離れた位置に席をとるなどの，偏見に根差した反応を示した。

その後，スキンヘッド以外の対象についても追試が行われ，リバウンド効果は比較的頑健な現象として知られるようになった。偏見を抑制しようとしているのに，その意図に反した結果となってしまうことから，この効果は「皮肉なリバウンド」とも呼ばれている。

### 監視過程の働き

リバウンド効果はどのように生じるのか。それについての理論はいくつかあるが，有力な理論は，抑制をしているときに実行される監視過程の影響を論じたものである（Macrae, Bodenhausen & Milne, et al., 1994; Wegner, 1994）。この場合の監視過程とは，抑制対象を実際に抑制することができているかを確認する過程であり，意識的に実行されることもあるが，意識されないままバックグラウンドで実行されることもある。理論によると，抑制対象に関する概念はこの監視過程を通して頻繁に活性化され，結果として，抑制対象がその後の判断や行為に利用されやすい状態をつくり出してしまふ。偏見を抑制する際には，自分が偏見に根差した反応をとっていないかを確認する過程が働くことで，抑制していたはずの反応を実行する可能性が次第に高まると考えるのである。

もちろん，頭の中でそのような準備状態が高まったからといって，それがそのまま極端な偏見の反応につながるわけではない。抑制のタガが外れないように常に気を配っていればよいのである。しかし，エネルギーを要する自己制御を続けていると，次第に消耗し（Baumeister, Heatherton & Tice, 1994），偏見を抑制することができなくなる。しかも，抑制しようとして気を配っている間には抑制が成功しているように思えるが，偏見を利用するための準備状態は着々と高まっていく。したがって，抑制することに気を配るのを止めたとき，あるいは，消耗して抑

制することができなくなったときには、リバウンドが生じやすいのである。

この理論のみを考慮すれば、偏見を抑制しようと努力する人は抑制とリバウンドを繰り返して経験し、自分の中の偏見に怯えて暮らすことになる。そんなはずはないだろう。理論から離れて現実を見つめれば、偏見のない振る舞いをするように配慮し、かつ、それを立派に遂行している人もいるように見える。おそらくさまざまな要因がリバウンド効果の生起を調整しているはずである。そこで、抑制することそれ自体の効果を検討するため、筆者と共同研究者らは、偏見を抑制する方略の違いに焦点を当てた。

### 抑制方略の種類

抑制方略にはどのようなものがあるかを知るために、自由記述形式の調査を行った。抑制対象は女性に対する偏見である。得られた自由記述から質的な分類を行った結果が表1である。抑制方略にはたしかにさまざまなものがあった。ただし、これらをもう少しまとめることができるだろう。そう考えて、今度は量的な分類を試みた。具体的には、質的な分類の結果をもとに偏見抑制の尺度を作成し、その尺度を用い

て調査を行い、得られたデータを探索的因子分析にかけた。結果は意外にも単純なものとなり、抑制方略は次の二つにまとまった。

- ① 回避方略：相手への関与や潜在的な問題状況を回避する方略
- ② 接近方略：相手について積極的に考えようとする方略

その後、高齢者に対する偏見の抑制について調査したデータからも、これらの方略が抽出された。どうやらこの二つが主要な方略のようである。

### 抑制方略の効果

実験では、参加者に偏見を抑制してもらい、その後、偏見がどのくらい利用されやすい状態にあるか（接近可能性という）を調べた。その状態を捉える手段として用いた課題の流れを次ページ図1に示した。① まず、注視点のプラスが表示され、参加者はこれに目を向ける。② 続いて、標的刺激（ここでは文字列）が表示され、参加者はこの文字列に意味があるかを判断し、回答のキーをすばやく押す。このとき、標的刺激が提示されてから参加者がキーを押すまでの時間が記録される。③ その後、何も表示されないブランクの画面となり、ここまでの①～③を1試行として、標的刺激を変えて同じことを何度も繰り返す。ランダムに表示される標的刺激の中には、偏見に関係する単語が含まれている。それらの単語に反応する時間が短いほど、偏見が頭の中で利用されやすい状態になっているとみなすことができる。

この課題を使って抑制方略の効果調べた。抑制対象は、女性または高齢者に対する偏見である。結果の概要を次ページ表2に示した。最初に行った実験（Oe & Oka, 2003）では、回避方略に相当する方略（集団置換え抑制）と接近方略に相当する方略（特性置換え抑制）を統制条件と比較した。その結果、前者の方略のみでリバウンド効果が生じていた。リバウンド効果の有無を決める認知過程を探りつつ、その後、いくつかの抑制方略の効果調べていった。全体としてはリバウンド効果が生じることが多い

表1 ステレオタイプ抑制方略の分類

分類	回答例
<b>個性化</b>	
個人的な情報の収集	相手をよく観察する
特定の判断次元の設定	仕事の能力で判断する
<b>カテゴリ操作</b>	
カテゴリからの脱離	性別に左右されないようにする
上位カテゴリへの焦点	人として相手を見ようと思う
同列カテゴリへの焦点	相手が男性だったらどうかを考える
下位カテゴリまたはカテゴリ内多様性への焦点	さまざまな女性を想像する
<b>隠蔽</b>	
情報表出の操作	頭では思っている、口には出さない
表出状況の回避	ステレオタイプを表明せざるを得ない状況を回避する
<b>停止</b>	
処置の回避	その人に対して何も判断しない
関係の回避	相手との距離をとる
思考・言動の熟慮	自分の発言に慎重になる

大江・岡・横井（2006）を改変。

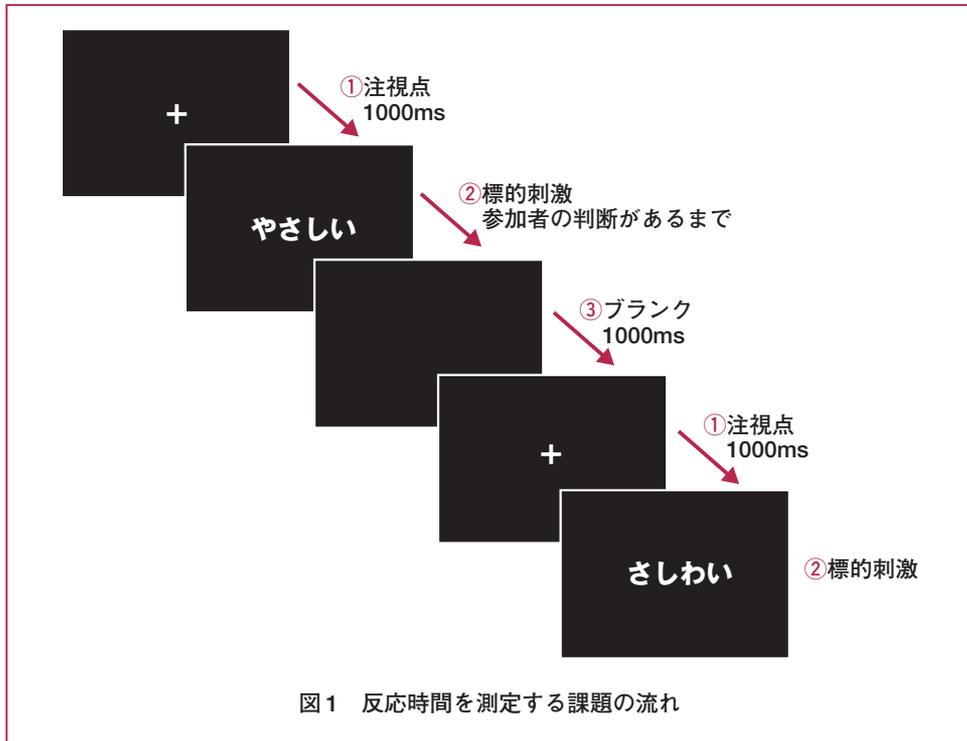


表2 抑制方略実行後のリバウンド効果の有無

抑制方略	リバウンドの有無
① 集団置換え抑制	○
② 特性置換え抑制	×
③ 反ステレオタイプ特性置換え抑制	○
④ 中立的特性置換え抑制	○
⑤ 連結なし抑制	○
⑥ 連結あり抑制	×

①～④は Oe & Oka (2003)。⑤、⑥は大江・繁樹 (2007)。

ものの、抑制をするなかで、偏見には関係しない特性を女性や高齢者に結びつけて考えるという操作をさせた場合には、リバウンド効果が起こりにくいことを示す結果となっている (大江・繁樹, 2007)。偏見の抑制は困難であるが、それを克服する術もあるようだ。

本稿では、一時的かつ意識的な抑制の効果をみてきたが、偏見の自己制御の研究は幅広く展開されている。ご関心のある方には、ぜひ足を踏み入れ、研究してほしい。

## 文献

- Baumeister, R. E., Heatherton, T. E. & Tice, D. M. (1994) *Losing control: How and why people fail at self-regulation*. San Diego, CA: Academic Press.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B. & Jetten, J. (1994) Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 808-817.
- Oe, T. & Oka, T. (2003) Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression. In K. S. Yang, K. K. Hwang, P. B. Pederson & I. Daibo (eds.), *Progress in Asian social psychology* (Vol.3): Conceptual and empirical contributions (pp.233-248). London: Praeger.
- 大江朋子・岡隆・横井俊 (2006) 「ステレオタイプ抑制の動機と方略: その分類と関係」『社会心理学研究』22, 33-47.
- 大江朋子・繁樹算男 (2007) 「ステレオタイプ抑制後の抑止効果とファン効果」『理論心理学研究』9, 1-11.
- Wegner, D. M. (1994) Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, 101, 34-52.